



関西学院同窓会 大阪支部

INTERVIEW

<http://www.kwangaku-osaka.org>

2017.10

探訪記

FILE

No.18

鴛田総合事務所 所長 鴛田 幸夫氏

昭和45(1970)年 関西学院大学 法学部 卒業

正々堂々 —— 信用こそがすべて

——子供の頃や関学時代の思い出をお聞かせください。

神戸生まれで、子供の頃から海が大好き。高校時代は、柔道部に在籍し、スポーツ好きの学生でした。

大学時代はユースホステル部に入りました。旅行をしたり、キャンプカウンセラーとして子供たちにキャンプの指導をしたりしていました。その活動の中で、家内とも知り合いました。

——法学部に進んでいますが、その頃から現在の仕事をめざっていたのでしょうか。

いえいえ、全く考えていませんでした。関学も家から近くて雰囲気がいいと思いい、選んだ程度でした。そういう意味では、今の若い人の方がいろいろと考えておられると思います。

——卒業後、小泉産業に就職されたのですか。

大企業に入るよりは、中々らしいの会社の方が自分の力が発揮できるのではないかと思い、選びました。営業で10年、百貨店担当をしていました。営業成績もよく社内表彰もいただきました。車1台が買えるぐらいのボーナスをもらったこともあります。でも、商品の納品などもしなければいけないため、肉体的に重労働でもありました。

——なぜ、独立をしようと思われたのですか。

営業成績がよかったこともあり、組織の中で発言権をもつようになりましたが、もつと自分の思い通りにやりたいと思うようになりました。

「よし、独立して飲食店をしよう」と思ってた準備をしていました。ところが、家内の両親に話が伝わり、大反対を受けました。不安定な職だと思われたのでしよう。

岳父が不動産の仕事をしていることもあり、「せっかくなら、不動産関係の資格をとって独立したら」とアドバイスをもらいました。

——どのような資格を取られたのですか。

土地調査家屋士、宅建、司法書士、行政書士などを4年間で取得しました。家内からは、「司法試験も受けてみたら」と言われましたが、すでに38歳。一番働ける40代の今がチャンスだと思い、独立しました。

——独立後、すぐに顧問先が見つかるわけではないうすよね。いかがでしたか。



鴛田総合事務所 所長
鴛田 幸夫 (おしだ ゆきお) 氏



メールや携帯電話ころか、FAXもない時代です。「書面を見てほしい」と言われたら、先方に出向く必要がありました。民事でもめているようなややこしい、手間のかかる案件をひとつずつこなしながら、信用をつけていきました。今でも覚えていますが、初年度の売上は1300万を超えました。よく頑張ったと思います。とにかく、いろんな会合や集まりにも顔を出し、家内が「夫婦喧嘩する暇もなかった」というくらい深夜帰宅の毎日でした。

——大妻は男を育てたと思いますが、当時はどのくらい「お父さん」を慕っていたのでしょうか。

司法書士は大阪で23000人もいます。士業は厳しい時代です。差別化しないと仕事は来ません。そのためには、「相手の課題を解決するために、人と違うことを考え出す力」が必要だと言っています。また、この仕事は「先生」と呼ばれる職種ですが、それぞれの分野には、いろんなことに詳しいとはいけないと言っています。例えば、工場に行けば「工場の先生」がおられるのです。その人たちに「教えてもらう」という姿勢が大切です。また、人間性を高めることが大切だと思っています。自分自身が成長すれば、いろんな人が集まってくる。1日の時間は、すべての人に等しく24時間しかありません。この24時間の使い方、成長できるかどうかが決まるのです。プライベートでは、いろんな所へ行き、いろんなものを自分の目でみなさいと言っています。貧乏旅行でもいいからと。若い今だからできること

「自分に負けたらあかん!」「男だろ!」と自分を鼓舞していました。また、すべての案件において、情報オープンにし、正々堂々と報酬を受けとることを旨としていました。お金よりも大切なことは「信用」です。信用があるからこそ、仕事を紹介してもらえるのだと思います。そのためにも不透明なことほししないと決めていました。仕事はファン作りです。その場では儲けにならなくても、「いつか返ってくる、いや返ってこなくてもいい」と思っていてやってきました。

——事務所のスタッフや若い方に伝えておられることを教えてください。

だと思っています。

——事務所も大きくなり、素晴らしいご活躍だと思っています。今思っておられることを教えてください。

現在は、司法書士8名を含め有資格者24名のスタッフがいます。案件が増えて対応していくうちに、こうなりました。でも、まだまだプロセスだと思っています。私は、死ぬときに「良かった」と思っていて死にたいと思います。また、改めて「二人で生きてきたわけではない」と思うようになりました。だからこそ、「背伸びをする必要はありませんが、世の中に恩返ししたい」と思っています。

——ありがとうございました。

2017年6月6日

場所 鶴田総合事務所

取材 伊賀重理／松野理一

鶴田 幸夫 おしだ ゆきお 氏
鶴田総合事務所 所長

1970年3月 関西学院大学 法学部 卒業
1970年4月 小泉産業株式会社 入社
1983年 鶴田事務所開設
その後鶴田総合事務所所長 就任。現在に至る。



編集後記
私も同じ士業として、士業への信用が大事と感じていましたが、鶴田先輩の軌跡をながい、改めて「開扉第」を心に刻みました。また、「1日24時間」をいかに悔いなく過ごすかは、ビジネスパーソンには共通の課題といえるのではないのでしょうか。

編集室長 小島善保（1995年法学部政治学科卒）